

子守歌詞章におけるあやし表現の 形態的・構造的特徴と地域差

椎 名 渉 子

1. 目的

日本の伝統的な子守歌詞章⁽¹⁾には、ネンネンヨ ネンネンヨ⁽²⁾などの子どもをあやす表現が多く見受けられる。本稿では、こうした表現をあやし表現と呼び、分析対象とする。

このあやし表現について具体的に説明すると、主に、反復性・リズム性を有し、就寝の命令や注意喚起の呼びかけを行うことである。反復性・リズム性とは、ネンネンやネーンなどのように撥音・長音などの特殊拍を有した音的特徴を持つ語によってもたらされた効果をさす。

金井(1987, p.38)では、民謡をはじめとする口承文芸全般における「はやしことば」を、人の心を陽気にさせて盛り上げる類の囃子であるとし、子守歌詞章の「はやしことば(本論でいうあやし表現)」を「人の心を沈静させ、静かに落ち着かせ」る類の「はやしことば」であるとしている。また、金井(1987, p.46)では子守歌詞章における「はやしことば(本論でいうあやし表現)」の特徴について次のように述べている。

「ねんねんころろ」というはやしことばが用いられているが、赤ん坊を眠らせるためにあやす言葉がはやしことばになったのである。そしてネンネンネンネンとかネンネンコロリとかネンコロリとかネンコロロンとかいう子守り歌に共通するはやしことばは、もとは泣く子をあやすことばであったが、その語源は「ねむれねむれ」とか「ねいれねいれ」とかいう命令語であったと考えられる。この命令語をくりかえしくりかえし赤ん坊に向かって言いきかせたり、ささやいたり、うたったりすることが、赤ん坊を眠らすのに有効な呪術であった(金井1987, p.46)。

こうしたあやし表現の地域差について椎名(2006)では、出現割合やバリエー

ション率などの量的側面と、出現位置といった談話論的観点からみた構造的側面を方言学的立場から考察した。しかし、あやし表現の具体的な中身、つまり表現形式・表現内容の特徴とその地域差については未分析である。就寝の主題や子どもへの注意喚起を意味するあやし表現には様々な語形が存在するものの、鶴野（2005）でも述べられている通り、その実態を総合的に明らかにした研究はまだ見当たらない。

そこで本稿では、子守歌詞章におけるあやし表現の具体的語形を分析対象とし、形態的・構造的特徴とそのバリエーションに目を向けることによって、子守歌詞章の地域差を明らかにしていきたい。

2. 方法

ここでは、分析方法として、分析の観点、資料と地域区分、あやし表現の単位について述べる。

2.1 分析の観点

子守歌詞章におけるあやし表現には、ネンネンコロリヨオコロリヨ、ネエンネエンネエンヨといった就寝の意を有する語が含まれるものが多い。また、ネンなどといった語を含まないオロロンバイオロロンバイ、ヨイヨイヨーなどのようなあやし表現も見受けられる。こうした語が反復される場合もあるが、反復されない場合もある。いずれにせよ、ネンやオロロンがもたらす語感はおノマトペのような滑らかさやリズムを生み、就寝に導く効果につながると考えられる。

これらの点を踏まえ、まず分析の観点 (a) では、就寝の意味が含まれるか否かを含め、あやし表現の種類とその出現状況を見る。子守歌詞章のあやし表現は就寝を主題とするものが大半を占めるが、就寝を主題としない表現がどのような地域に見られるかについても確認する。

さらに、観点 (b) ではあやし表現の形態的側面に着目し、観点 (c) では地域差・地域的傾向を捉えたい。

以上、(a) ～ (c) の観点から分析を試みる。

(a) あやし表現の種類と出現状況

(b) あやし表現の形態的・構造的特徴

(c) あやし表現の地域差・地域的傾向

2.2 資料と地域区分

本稿では以下の①～④の資料に記載された子守歌資料を分析対象とする。これらは地域的・数量的にみて大規模な資料集であり、採集地、被調査者等の情報が記載されており、資料としての妥当性が高い（本城屋2006）。

資料①北原白秋編（1974）『日本伝承童謡集成 第一巻 子守唄篇』三省堂

資料②日本放送協会編（1952～1977）『日本民謡大観』日本放送出版協会

資料③真鍋昌弘編（1979）『日本庶民生史料集成 第二十四巻 民謡童謡』三一書房

資料④浅野建二・後藤捷一・平井康三郎監修（1979～1987）『日本わらべ歌全集 全二十七巻』柳原書店

本稿では地域差を捉える際、以下のように地域区分を行い、考察する⁽³⁾。カッコ内の数字は資料①～④にみられる各地域の子守歌総数である。

東北（419）：青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島／関東（332）：茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川／中部（1946）：新潟・富山・石川・福井・山梨・長野・岐阜・静岡・愛知／近畿（1544）：三重・滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山／四国（294）：徳島・香川・愛媛・高知／中国（252）：鳥取・島根・岡山・広島・山口／九州（376）：福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島

2.3 あやし表現の単位

あやし表現をカウントする際、どこまでをあやし表現とみなすかという単位について述べる。たとえば、「ネンネンコロリヨ オコロリヨ」といった反復性・リズム性を有する語の部分の子守歌詞章から抽出する。以下に子守歌詞章を掲げ、分析対象として抽出するあやし表現は下線で示した。

〔詞章例〕

ねんねんよ かんかんよ、

おらのお守はどこへいった、
 あの山越えて里へいった、
 お里の土産になに買ってきた、
 でんでん太鼓に笙の笛、
 おきあがり小法師に風車、
ねんねんよう、かんかんよ。

(資料①関東〔千葉〕, p. 3, 下線は筆者加筆)⁽⁴⁾

3. あやし表現の種類と出現状況

ネン類には就寝(寝る)を意味すると考えられる「ネ」・「ネン」などという語を含む形式と含まない形式とがあることは2.1において述べた。

そこで、そうした表現の出現様相を確認するため、就寝の意を有する語(「ネン」等)を含む類(a. ネン類)と、含まない類(b. 非ネン類)とに二分し、それぞれの異なりと延べ、合計を掲げ、バリエーション率を示した(表1)。バリエーション率は、パーセンテージが高いほうがあやし表現に多くのバリエーションを有するということになる。

表1をみると、まず、どの地域もネン類が大半を占めていることが分かる。さらに、b. 非ネン類をみると、異なりと延べが同数であることがわかる。つまり、非ネン類に関して言えば、バリエーション率はどの地域も100%ということになる。

また、全体のバリエーション率をみると、表内の色付き部分に示すように東北と九州はバリエーション率が他地域と比較して高い一方、中部から中国地方にかけては10%台を示した。日本周辺部と中央部でこのような周囲分布の様相を呈している点は興味深い。

表1. あやし表現の異なりと延べ

地域	a. ネン類 (異なり/延べ)	b. 非ネン類 (異なり/延べ)	異なり合計/延べ合計 (a. 異なり+b. 異なり/ a. 延べ+b. 延べ)	バリエーション率 (異なり合計÷延べ合計 ×100)
東北	167/581	10/10	177/591	29.90%
関東	82/370	9/9	91/379	24.00%

中部	226/892	10/10	236/902	14.70%
近畿	121/844	10/10	131/854	13.10%
四国	79/431	1 / 1	80/432	18.50%
中国	71/463	0 / 0	71/463	15.30%
九州	165/620	14.14	179/634	28.20%

4. あやし表現の形態的・構造的特徴

では、あやし表現には具体的にどのような形態が存在し、どのような特徴が見られるのであろうか。本章では、前章に見た各類（ネン類／非ネン類）の形態的・構造的特徴を整理したい。

まず、表2に示したように形態的特徴からあやし表現を①～③に分類した。これらの分類基準に従って各類のあやし表現の語形をみていきたい。

表2. あやし表現の分類基準

①純粹反復タイプ 就寝を意味する「ネンネン」などの語や就寝の命令形を基調として比較的単純に反復する。 〔例〕 ネンネンネンネンネンネンヨ / ネイレ ネイレ
②変形反復タイプ（ネンネン＋接尾辞的要素） 就寝を意味する「ネンネン」などの語以外の要素を取り入れる。 〔例〕 ネンネンコロリンネンコロリン / ネンネンヤボロロンヤ
③命令文タイプ 就寝の命令文や疑問文などの文形態になる。 〔例〕 ネンネコシャツシャリマセ / オヤスミナサレトコナサレ

4.1 ネン類のタイプと語形

ネン類には就寝の意味を持つと考えられる「ネン」などの語が、撥音や長音を伴って実現されるものを含めた。

①**純粹反復タイプ**にはネンやネーンなどの就寝の意味を表すと考えられる撥音や長音を伴った語や、就寝の命令形であるネイレ(寝入れ)・ネロジャ(寝ろじゃ)などが反復されるものを含めた。一定のまとまりを持つ語が二回以上反復されるもので、比較的単純な構成のものである。たとえば、1表現(1単位)で例示すると、ネンネンネンネンネンネンヨや、ネンネコネンネコネンネコヨなどがそれである。このタイプの形態的特徴としては、ネンネンやネンネコといった語がそれぞれ二、三回反復され、終助詞の役割を担う「ヨ」が付加されている点である。また、ネエエンネエエンネンネコヨという1表現(1単位)のうち、ネエエンネエエンのように完全な反復でないが1表現(1単位)内の一部が反復を行っているものもここに含めた。そしてこれらの語彙的特徴としては、ネエエンやネンネコなどのように一定のまとまりを有する語の語頭が「ネ」で始まるもので比較的単純に反復されるものを含めた。こうした、一定のまとまりを持つ語が反復される場合は (a) **語の反復**、命令形を反復させるものを (b) **文の反復**とした。

また、②**変形反復タイプ**とは、ネンネンなどの語にネンネン以外の接尾辞的要素が付加されて反復するものである。たとえば、ネンネコカンカコネンネコヨ、ネンネンコロリンネンネンコロリン、ネンネンヤボロロンヤなどのように、ネンネンなどの表現の前部が変形された語が付加されたり、ネンネンに「ネ」以外の音を有する要素が付加された形態が反復されるものを含めた。

そして、③**命令文タイプ**は、ネイレ(寝入れ)やネンサイ(寝なさい)のような命令文やネッタカ(寝たか)などの疑問文が一つでも含まれているものと定義した。つまり、ネエエンネエエンやネンネンネンネコなどの「○エン」・「○ン○ン」・「○ン○コ」といった長音や撥音の特殊拍を有するリズム重視の語に終始するのではなく、文形態が一部に含まれていればここに分類した。たとえば、ネンネンコロリヨネンネシテなどのように、②**変形反復タイプ**に現れた形式が前接するものも、ネンネシテという命令文を含むため、③**命令文タイプ**に分類した。このように、異なる内容や異なる命令文の融合型については、③**命令文タイプ**の (a) **変形命令文**に、命令文が一回のみ用いられる場合は (b) **単純な命令文**に分類した。

表2に挙げた分類基準をもとにして、ネン類に登場する語形を表3に掲げ

る（順不同）。その際、②変形反復タイプは、ネンネンなど就寝の意味をあらわす語に付加する音によって分類した。

表3. あやし表現「ネン類」の語形

① 純粹反復タイプ

(a) 語の反復

例 ネネネネ、ネイネイネイネイ、ネイネイヤネイネイヤ、ネンネネンネヨ、ネンネヤネンネヤ、ネンネヤコネンネヤコ、ネンネコヤネンネコネンネコヤ（ヨ）、ネエンネエンネエンヨ、ネンネンネンネンネンネンヨ、ネンネコネンネコネンネコヨ、ネンネロネンネロ、ネンネロヤネンネロヤ、ネンネロネンネロネンネロヤ、ネンネンネロネロネンネロヤ、ネンネコヨウネンネコヨウ、ネンネコヤーエネンネコヤーエ、ネネココネネココネネココーヨ、ネンネンヨウネンネンヨウ、ネエンネエンネンネコヨ、ネエレネエレネンコロヨ

(b) 文の反復

例 ネイセヨネイセヨ、ネイレネイレ、ネエレネエレ、ネセヨネセヨネセヨネセヨ、ネタネタネタヨ（過去形）、ネレネレ、ネレジャネレジャ、ネロネロ、ネロジャネロネロ、ネロジャネロジャネロジャエ、ネロテバネロテバ、ネロテバヤ（ヨ）ネロテバヤ（ヨ）、ネロテバヨネロテバヨ、ネロヤレネロヤレネロヤレヤ、ネンネコセネンネコセ、ネンネシヨネンネシヨネンネシヨーヨ、ネンコセーネンコセー、ホーラニイレニイレヨ

② 変形反復タイプ

(a) +オ系 / コ系 （※下線: 接尾辞的要素と判断した部分）

例 ネンネンヤネンネンヤオウオウヤ、ネンネンヨウヨウオコライヨ、ネンネンヨオコランヨ、ネンネンヨウオコロンヨ、ネンネンヤオコロリヤ、ネンネンヨウオコロリヨウ、ネンネコヤオベロリヤ、ネンネンヤオベロンヤ、ネンネンヤオボロンヤ・ネンネヤオロウロ、ネンネンヤオロロンヤネンネコヤオンボコヤ、ネンネヤオンモリヤ、ネンネコウコ、ネンネンヨコウコウヨ、ネイヤアコイヤアネンネシナア、ネンネンコウヤネンコウヤ、ネンネロヤアエコウロコロ、ネ

ンネンコッコロ、ネンネンコッコネンネンコッコ、ネンネコマリネンコマリ、ネンネコロイチ、ネンネンコロコロ、ネンネコロコロネンネロヤ、ネンネンコロチャコネンコロチャコヨ一ヨ、ネンネンコロリヨオコロリヨ、ネンネンコロリチマコロリ、ネンネンヤコロコロヤ、ネンネンコロコロコロコロコロヨ (ヤ)、ネンネコロリンオコロリヨ、ネンネンコロリントコナサレ、ネンコロリンネンコロリン、ネンネンコロリンシャンコロリン、ネンネンコロリヨネンコロリ、ネンネンコロレヨネンコロレ、ネンネンコロロンネンコリーイ、ネンコロロンサイコロロン、ネンネヤコロロネンネンヤ、ネンネロコンコロダダロヤ、ネンネヤコンコヤ、ネンネンコンニヤタンコロヤ、ネンネロヤコンコロヤ、ネンネンコンコロ、ネンネンヤコンコヤ、ネンネコンコヤネンネコンコヤ、ネンネンヤコンコンヤ、ネンネコンボウコンボウヨ、ネンネンヤコンボウヤ、ネンネコヤコンボウヤ、ネンネコヤコンボコヤ

(b) +ホ系

例 ネンネンホロリコ、ネンネホロロン

(c) +カ系

例 ネンネコヤカンカコヤ、ネンネロカンカラネンネロヤ、ネンネロカンカロネンネロヤ、ネンネエカンカネネエカンカ、ネンネバイバイネンネコカツチリ、ネンネンカンカン、ネンネンヨカンカンヨ

(d) +サ系

例 ネンコロロンサイコロロン、ネンネンサイサイ、ネンネンサイサイネンネコサイサイ、ネンサイヨサイネコヨ、ネンネコサツサイトコサツサイ、ネンネサンシヨ、ネンネンネンネンネンネンネンサンネンヨ

(e) +P/B系

例 ネンネコバンパコネンネコヨ、ネンネバイバイネンネコカツチリ、ネンネンバンバン、ネンネンヤボロロンヤ、ネンネヤコピイデヤヤエエヤ、ネンネヤピロロ、ネンネヤピロロピロ、ネンネヤピロロ

(f) +ヤ行系

例 ネンネコヤイヤコ、ネンネンヤアヤアネンヤアヤア、ネンネコヤアレネンネコヨ、ネンネンヨイヨイヨイ、ネンネンヨイヨイネンネンヨ、ネンネンネンネヨイヨイヨ、ネンネヨウヤイ

(g) 変形反復その他(※感動詞が付加, 上記以外の音が付加など)

例 ネンネンメッチャチャンチャラメッチャ、ホリヤネンネンネンネンヨ、ソレヤネイレネイレヨ、ソーリヤネンネンネンネンヨ、アーネンネンヨ、ネンネコセタンタコセ、ホウホラネンネンネンネンヨ、ホラホラネムレネムレネムレヨオン

③命令文タイプ

(a) 命令文に他の語が付加される・異なる命令文が組み合わせられる；変形命令文

例 ネンネコホロリコトコサンセ、ネエンネエンネタイセ、ネンネンネシロコンコシロ、ネエロネエロネンネシロ、ネンネンネンネンネンネシナ、ネンネンネンネンネンネシヤ、ネンネンヨウネシナヨ、ネンネンネロヤレネンネシナ、ネンネコネンネガネンネシナア、ネンネコンコネンネシロハア、ネンネンネロネロネロデバヤ、ネンネスランセオヨランセ、ネレジャネレネレ、ネンネコホロリコトコサンセ、ネンネンコロリントコナサレ、ネンネネロネロネンネコセ、ネロジャヤイヤイヤイ、ネンネコナサレ オコロリナサレ、ネンネシナサレ ギョシ (御寝) ナリナサレ、ネンネシナサレ オヤスミナサレ、ネンネシナサレ オネンネナサレ、ネンネネチヨクレ (寝ちよくれ)、ネンネセロ コンボセロ ウッチセロ、ネイヤアコイヤア ネンネシヤ

(b) 命令文が一回のみで構成される；単純な命令文

例 ヨオクネレ(よく寝れ)、ネンサイ、ネンネコサンセ、ネンネコシャッシャリマセ、ネンネコシャッシャリマッシャ、ネンネシテクレ、ネンネセロ、ネンネシタモ、ネンネシナサレ、ネンネネテクレ、ネンネナサレヨ、ネンネナサレマセ、ネンネンサンシヨ、ネンネシャンセ、ネンネンネツタカ

①純粋反復・②変形反復タイプは反復形態をとるため「反復形」、③命令文タイプは、非反復の形態をとるため「一回形」と分類することができ、形態的特徴を大きく分ける基準として反復か非反復かという点で考えることができそうだ。また、このことは、言い換えれば反復は同一の語を繰り返すという意味でリズム的であるといえ、一方、非反復は言語的性格の強い表現であると特徴付けることができる。前者のリズム性を重視した反復形の表現が、より原初

的なあやし表現の形態であるとする、こうしたリズム性と言語性のどちらの特徴が多く含まれるかという点から地域差を捉えることによって、あやし表現の変遷過程を推察できると考えた。

4.2 非ネン類のタイプと語形

非ネン類には、就寝（寝る・眠る）を意味するネロやネンといった「ネ」を含まないあやし表現を含めた。前節のネン類に表れたタイプと異なる点は、③命令文タイプが存在しないことである。

具体的な語形をみていくと、「オ」・「コ」・「ホ」・「ヨ」などの音が撥音や長音と共起して形成される。たとえば、詞章例（1）などのようなオロランのほか、オロロン、ハウロロ、ヨイヨイといったようなものである。

（1）おろらんや おろらんや（資料①中部〔福井〕, p.162）

こうした、「ネ」を伴わないあやし表現について鶴野（2005）では、ハウロロ・オロロといった例を取り上げ、このような音を有するものはアイヌ民族の子守歌（イフムケ）において、舌や喉の奥を震わせて出す「ルルルル（子音rの連続音）」のあやし言葉と関係があるのではないかと指摘する（p.80）。鶴野（2005）では、こうしたあやし表現についてネンネン系よりも古層形態であるという仮説を立てているが実証には至っていない。本節においても仮説の実証については稿を改める必要があるが、こうした「ネ」以外のあやし表現がどのような地域に存在するのかも含めてみていきたい。

非ネン類の語形と地域は表4の通りである。（ ）内は出現する都府県名を示し、①純粹反復タイプと②変形反復タイプとに分け、それぞれを（a）～（d）に分類した。たとえば、オイヤレオイヤレというあやし表現であれば、「オ」から開始されるため①純粹反復タイプの（a）オ系と分類した。

表4. あやし表現「非ネン類」の語形

①純粹反復タイプ
(a) オ系
例 オアイヤレオアイヤレ・オワイヤレオワイヤレ・オロロンバエオロ

ロンバエ・オーワイオーワイ・オワイヤレヨオワイヤレヨ（山形）、
オロランヤオロランヤ（福井）、オロロンヨオロロンヨ・オロロンバ
イオロロンバイ（熊本）、オロロンオロロンオロロンバイ（熊本）

(b) コ系

例 コッコイコイコッコイコイ（京都）、コロロンコロロンコロロンヨ・
コロロンコロロンヤ・コロロンコロロンコロロンヤ（長崎）

(c) ハ行系

例 ハイヨハイヤハイヨハイヤ（岩手）、ホウロロホウロロ（千葉）、ホ
イホイ（京都）、ホーワレホーワレホーワレヨ・ホロロホロロホロ
ロロ（宮崎）

(d) ヤ行系

例 ヨンヨンヨンヤアヨンヨンヨ・ヨエヨエヨエヤア（山形）、ヨイヨイ
ヨイヨイホラヨイヨ（千葉）、ヨイヨイ（東京・兵庫・京都）、ヨシ
ヨシヨシヨシ（茨城）、ヤイヤイ・ヨシヨシ（栃木）、ヨイヨイヨイ
ヨイヨイヨイヨ・ヨイヨイヨウラ・ヨウイヨウイ（埼玉）、ヨイヨイ
ヨオヨイヨイヨ・ヨオヨイヨイヨ（山梨）、ヨヨラホイヨヨラホイ（京
都）、ヨイヨコヨイヨコヨイヨコヨ（宮崎）、ヨイヨイヨイヨイヨイヨー
ヨーヨヨーヨヨーヨ・ヨークイヨークイヨークイヨ（鹿児島）

②変形反復タイプ

(a) オ系

例 オワイヤオワイヤオワイヤヤレヤレ（山形）、オロロロヤコロロペロロ
イヤ・オロロンコロロン（石川）、オロロイコロロイ・オロロイロイ
ロイロイバイ（福岡）

(b) コ系

例 コロリヤコロリヤチンコロリ（長崎）

(c) ハ行系

例 ホラホラヤイヤイ（茨城）、ペロロンサイコトコサイコ（石川）

(d) ヤ行系

例 イヨウイイヨウイヨイヨイヨ（静岡）、ヨーイヨーイココラコイ・ヨ
ヨイヨイココラコイ（京都）

【その他】オンバエヤレヤ（山形）

表4をみると、バリエーションが多いのが①**純粹反復タイプ**の(a)オ系と(d)ヤ行系である。(a)オ系は東北や中部の日本海側と九州に、(d)ヤ行系は日本海側の東北と関東・中部・近畿・九州というように、多くの地域に見受けられる。

また、表4の(a)オ系にはオロロン、(d)ヤ行系にはヨイヨイといった語が現れているが、表3に示したネン類の②**変形反復タイプ**の(a)＋オ系／コ系にあるネンネンヤオロロンヤ、同じく表3に示したネン類の②**変形反復タイプ**の(f)＋ヤ行系にあるネンネンヨイヨイヨイのように、ネン類と共起した形態も見られた。

しかし、「オロロンオロロン ヨイヨイヨイ」などのように、オ系とヤ行系との共起型は見られない。オ系やヤ行系は、ネンネンなどのネン類よりも古層の表現であるという鶴野(2005)の仮説を考え含めると、オ系とヤ行系はそれぞれが個別にネン類の語形と融合したと考えられよう。

たしかに、オ系はオロロンやオロロンバエなどのように「オ」のあとに子音「r」の連続音が用いられることが多い。これは鶴野(2005)の説に従うと喉の奥を鳴らす音を模した擬音語的な語であると考えられる。一方、ヨイヨイなどのヤ行系は呼びかけなどを意味する指示詞に近い性質を有すると考えられ、両者の出自は異なると想定できる。このうち、オロロンなどのオ系は、「寝る」の意味を有すると想定されるネン類や、呼びかけの意味を有すると想定されるヨイヨイなどのヤ行系に対して、非概念系の要素とみることができる。こうしたオ系の表現が東北や九州、中部の日本海側に見られた。一方、関東にはヨイヨイなどのヤ行系が見られた。

これらのことから、「**非ネン類のオ系**(日本周辺部) ⇔ **ネン類**(日本中央部・内陸部)・**非ネン類のヤ行系**(関東・中部などの沿岸部)」という周圈的な様相を示したことによって、「**非ネン類**〔非概念〕 ⇒ **ネン類**〔概念〕」という変遷過程を想定することができる。

こうした「概念／非概念」の対立については、澤村(2010)が感動詞の東西差を指摘し、「**非概念系感動詞**(東日本) ⇒ **概念系感動詞**(西日本；近畿)」と提示した変遷過程と重なる面があるとみることができる。あやし表現と感動詞とは言語構造や言語単位が異なるため一概に指摘することはできないが、こうした品詞の変遷過程と類似する過程を子守歌詞章が辿っていることは興味深い。

5. あやし表現の形態的・構造的特徴からみる地域差

前節において、反復か、非反復かという基準で考察する観点について触れた。そこで、本節においては、ネン類・非ネン類含め、この点についてみていきたい。

具体的には、①**純粹反復タイプ**・②**変形反復タイプ**を反復形とし、③**命令文タイプ**を非反復形と捉え、その地域差をみる。異なり表現数の合計(表1の「異なり合計」)を母数として、タイプ別に出現表現数を表5に示した。表内の地域名に示したカッコ内は異なり表現数(表1の「異なり合計」)をさす。東北であれば、177の異なり表現数のうち、①**純粹反復タイプ**の異なり表現数は128ということになる。それぞれのタイプのなかで多数を占める地域には色を付け太字で示した。

表5. タイプ別表現数

	反復形			非反復形	
	①純粹反復タイプ		②変形反復タイプ	③命令文タイプ	
	(a)語の反復※	(b)文の反復		(a)変形命令文	(b)単純な命令文
東北(177)	128	24	25	0	0
関東(91)	15	8	66	0	2
中部(236)	36	0	189	6	5
近畿(131)	27	0	38	18	43
四国(80)	56	0	19	2	3
中国(71)	39	1	25	4	2
九州(179)	102	4	71	0	2

※非ネン類の①純粹反復タイプは (a) 語の反復に含めた。

これらの分類項目のなかで、語の反復を含む①**純粹反復タイプ**が最もリズム性を有する(以下、リズム的と称する)といえる。一方で、反復を行わない③**命令文タイプ**の (b) **単純な命令文**が最も一般的な文の形態を有している(以下、言語的と称する)と考えることができる。そうすると、リズム的か言語的かという特徴から周囲の様相が窺えたことになる。

表5をみると、①**純粹反復タイプ**・②**変形反復タイプ**のうち、①**純粹反復**

タイプは主に東北や四国・中国・九州といった日本周辺部に多く見られることがわかる。東北においては、(a)語の反復が特に多く、(b)文の反復も他地域と比較して多く見られた。たとえば、ネロジャネロジャ・ネロテバヤネロテバヤなどは東北に多く見受けられた。また、九州においても、ネタネタネタヨやネイレネイレネイレヨなどの(b)文の反復が少数ではあるが見られた。よって、東北・九州では同一語形を反復させる特徴を有するといえそうである。

一方、②変形反復タイプは関東・中部に目立つ。これらの地域では、純粹な反復だけではなく、語を変形させて反復するタイプも用いられている。ネンネロカンカコネンネコヤといった(d)+カ系や、ネンネロヤコンコロヤなどの(a)+オ系/コ系が関東に目立つ。

そして、③命令文タイプは近畿に特徴的である。一方、東北や九州では極端に少ない。こうした、反復させるか否かという点に地域的傾向が認められた。近畿では①純粹反復・②変形反復タイプ自体が少ない。しかし、東北では命令文であっても反復させる表現が多く見られる。

これらを周圏論の視点から考察すると、東北や九州といった日本周辺部に多く見られた①純粹反復・②変形反復タイプは古層形態であるとみることができ、さらに、近畿に目立った③命令文タイプは、新しい語形と仮定することができそうである。

また、近畿では③命令文タイプが積極的に使用されているが、これらは、表現の嗜好の地域差という観点からの解釈も可能であると考ええる。命令形のように述部が表現内に登場するのは、あやし表現だけでなく甘やかし表現においても同様の傾向を示し、近畿を中心とした西日本では述部の表現が積極的に用いられている(椎名2005)。こうした点から、子守歌詞章における近畿を中心とした西日本の特徴の一つとみてよさそうである。

また、述部表現が現れる際、ネンネシロといった常体ではなく、近畿ではネンネナサイマセのように敬体が多いことも特徴的であり、このことは敬語の地域差においては加藤(1973)が「西高東低」であるとした傾向と一致する。東日本には敬体の命令文はあらわれなかった。

このように、述部の敬体が子どもへの働きかけの際に用いられる点については、日常生活の言語行動においても指摘がある。三井(2002)では、国立国語

研究所編『方言文法全国地図第5集』（2002，財務省印刷局）所収の禁止表現の地図（第221～224図）を取り上げ、西日本では「行くな」とやさしく言うときに敬語助動詞を用いた禁止文「イキナサンナ」類を使う地点数が多いと指摘している。これは禁止文を取り上げているため、一概に命令形と同様に捉えることはできないが、子どもに対する注意・促しの言語行動において、近畿を含む西日本でこのような敬体が用いられていることと、子守歌詞章の就寝を促す表現に敬体が用いられていることとは共通の表現意識があるのではないかと推察できよう。また、昔話の語り中出现する表現にも、敬語の使用が西日本に多く東日本に少ないという地域差がみられた（木部ほか2013, p. 73）。このように、同じ口承文芸のなかにも同様の地域的傾向が認められる。

最後に、このような反復形と非反復形といった形態的特徴の傾向と、あやし表現の出現位置の関係について述べておく。出現位置については、出現位置がまだらで反復も多く、詞章のどの箇所にも登場し得る比較的自由的な出現形態をとるのは東北と四国～九州であるという地域差がみられた（椎名2006）。このように、子守歌詞章においてあやし表現の出現位置が固定的でないという出現形態を有する地域と、反復形をとっている地域が重なることがわかった。

以上の傾向を周囲論から考慮すると、反復する形態が原初的な子守歌詞章のスタイルであり、それらが日本周辺部に残存するとみることができよう。

6. まとめと課題

これまでの傾向を整理すると、表6のようになる。

表6. あやし表現の地域的傾向

東北	ネン類：純粹反復形 非ネン類：オ系
関東	ネン類：変形反復形 非ネン類：ヤ行系
中部	ネン類：変形反復形 非ネン類：オ系

近畿	ネン類：非反復形
四国	ネン類：語の反復形、変形反復形
中国	ネン類：語の反復形、変形反復形
九州	ネン類：語の反復形、変形反復形
	非ネン類：オ系・ヤ行系

まず、近畿の非反復形を円の中心として、その外側には語の反復と変形反復形が多い関東と四国～中国が囲み、その外側には非ネン類も目立つ九州と、語も文も反復させる純粋な反復形が多い東北があるというように、周圏分布的様相を呈していることが分かった。

このように、子守歌詞章のあやし表現は、周圏論を適用して解釈したが、子守歌詞章におけるあやし表現以外の詞章については、これまで椎名(2005, 2006, 2014)において、東西差をはじめとした方言区画論的傾向を示すものも多くある。これは言語内部的な要因だけでなく、地域的思考や志向、社会的背景などが子守歌詞章に反映された結果だと考えられる。

では、なぜあやし表現は周圏分布的様相を色濃く残したのか。その要因を想像すると、あやし表現の持つ独立的な性質が関与すると考える。あやし表現は、他の口承文芸でいう「はやし言葉」や「掛け声」、昔話の発端句・結末句などに通ずるような独立した性格を有し、他の詞章と比較して様々な変化の影響を受けにくかったのではないかと考える。

そうした点も踏まえ、今後は、あやし表現の持つ機能などについても論を深めることによって、子守歌をはじめとする「歌」という素材が持つ普遍的側面や、伝播過程において変化する流動的側面など、口承文芸のもつ言語的側面の多様性を掘り下げる必要があるだろう。

注

- (1) 口承文芸の一つとしての子守歌は、近世歌謡調といわれる七七音・七語音の詞型をもつ(小島1985)。仲井(1976, p.184)では、詞型を有する歌謡はその土地に合うように変えられる部分と絶対に変えないで歌う部分とがあると指摘する。
- (2) 分析対象とする子守歌詞章のあやし表現はカタカナ表記で示す。
- (3) 北海道および琉球諸島地域は子守歌資料の数量自体が少なく、統計的な分析を行う本稿では問題となるため対象から外し、歌数の多い本州のみを対象地域としている。
- (4) 詞章例のあとの()内には、2.3に挙げた資料番号と地域区分、[]に都府県、掲載頁、注記を示す。

参考文献

- 鶴野祐介(2005)「子守唄の種類と地域性」『別冊環⑩子守唄よ、甦れ』藤原書店
- 金井清光(1987)『歌謡と民謡の研究－民衆の生活の声としての歌謡研究』桜楓社
- 木部暢子・竹田晃子・田中ゆかり・日高水穂・三井はるみ(2013)『方言学入門』三省堂
- 小島美子(1985)「日本民謡における詞型と曲型の流動性－椎葉村の春の歌を中心に－」『日本歌謡研究』24
- 澤村美幸(2010)「感動詞の地域差と歴史」小林隆・篠崎晃一編『方言の発見』ひつじ書房
- 椎名渉子(2005)「子守歌における働きかけの表現の構造と地域差－動詞述語に注目して－」『言語科学論集』第9集
- 椎名渉子(2006)「あやし表現からみる子守歌詞章の地域差」『東北文化研究紀要』47東北大学東北文化研究室
- 椎名渉子(2014)「子守歌詞章におけるほめ表現・けなし表現の地域差－表現類型の計量的・構造的側面に着目して－」『国語学研究』53
- 仲井幸二郎(1976)「類型の詞章」池田弥三郎編『ことばの遊びと芸術』大修館書店
- 本城屋勝(2006)『増補わらべうた文献総覧解題』無明舎出版
- 三井はるみ(2002)「働きかけの表現の地域差へのアプローチ」『日本語学』21-11明治書院

付記

本研究は日本学術振興会科学研究費(若手研究(B)16K16847「口承文芸と日常言語の地域差・地域性解明のための談話論的・表現法的研究」)の助成を受けたものです。